



1st

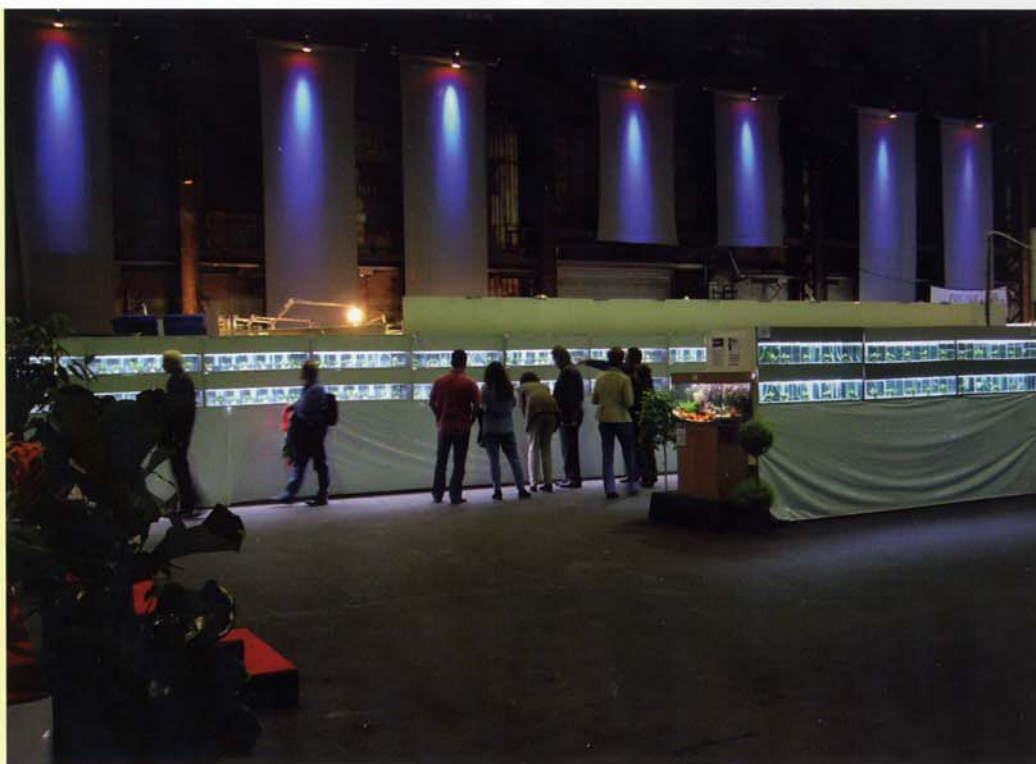
Internationales GUPPY CHAMPIONAT

第1回 インターナショナル
グッピーコンテスト
in ドイツ



今年の9月30から10月5日にかけて、ドイツのデュースブルクにて、第1回インターナショナルグッピーコンテストが開催され、日本を含めて650ペアのグッピーが出品された。会場は世界各国からグッピー愛好家が集結し、大いなる盛り上がりを見せた。ここでは入賞したグッピーや会場で見つけた注目品種を中心に見ていこう

Report & Photos/ 藤原彦亮 Yoshiaki Fujiwara
Photos/ 石間経章 Tunesaki Ishima
Thanks/ 岩崎 登 Noboru Iwasaki



コンテスト初日の会場風景。コンテスト前日にTVの取材もあり、オープン時からグッピー愛好家や一般の方々が続々と来場し、1匹ずつ熱心に見入っていた

この催しは、約5,500㎡という広い会場に約100社のアクアリウム関連のテナントが出店するといった大規模なもので、初日から多くの愛好家が各地より来場し大盛況でした。期間中に例年同時開催される「デイスカス・コンテスト」の代わりに、今回は初めて「第1回インターナショナル・グッピー・コンテスト」が、イベントの目玉として行なわれました。このコンテストには、ドイツ、ポーランド、アメリカ、ブラジル、シンガポール、台湾、日本など10カ国から約650ペア（出品者162名）のグッピーが出品されました。日本からも32名のブリーダーから集められた110ペアのグッピーが、コンテストに挑戦することになったのです。

審査は各国から参加した15名の審査員によって、およそ2日間に渡って行なわれました。審査方法はヨーロッパ・スタンダード基準をベース（各部位ごとのポイント評価）に、3つのブロックに分けられます。審査基準は、色彩よりも形が重視されて、配点からみても、いかにその品種のスタンダードのフォームに近いかがポイントになったようです。総合優勝のダブルソードは、体が大きく、ソード部分がしっかりとしているのが特徴でした。日本のワイルドフォームのグッピーは体が小さいものが多いのですが、シヨークオリティのものは体も大きく見栄えがまったく違います。部門優勝の個体も形がポイントで、尾ビレの色彩や

ドイツの商業都市デュッセルドルフから北へ25km、ライン川とルール川の合流地点に位置する西部の工業都市（世界でも有数の河港を有する町）デュースブルクにて第8回アクアリウム・観賞魚展が開催されました。

世界最大規模のグッピーコンテスト

総合優勝

ヴェールテール1位



アメリカのRoebuck, Lukeが出品したフルレッド。アメリカのグッピーは体格も大きく見栄えのするものが多い。



ソードテールの審査ポイントは背ビレ、尾ビレの長さでバランスが重要となっている。両方とも剣のように先が尖っていかなくてはポイントはマイナスされる。この個体は総合優勝にふさわしく、ボディと各ヒレとのバランスが抜群。

スピードテール1位



スピードテールの特徴がよく出ているタイプ。尾ビレと背ビレの色柄も同調しており、とにかく体型がしっかりしている。

スピアテール1位



日本から出品した加藤彰宏さんのスピアテール。ヨーロッパの審査員も認める出来栄。日本のブリーダーもぜひショートテールやソードテール系に力を入れて欲しい。

ラウンドテール1位



モスコバンダで知られているタイプ。尾ビレの色が抜けているものが多いが、これはしっかりとおり存在感があった。

ライアテール1位



日本でライアテールの代表といえばシメルベニヒだが、尾ビレの剣が崩れて良くないものが多い。このタイプは背ビレ、尾ビレ共にしっかりと見栄えがある。

トップソード1位



トップソードは圧倒的にコブラ系が多い。このグッピーはポイントの主軸となるであろう背ビレと尾ビレのソード部分がしっかりと見えている。

ボトムソード1位



ボトムソードはトップソードに比べ、いろいろな色合いのものが出品される。日本のボトムソードは剣の部分がしっかりと見えていないものが多いが、部門1位の個体はさすが。見習いたいものだ。

注目すべき品種

2000年のWGCウィーン大会で初めて目にした「モスクワレッド」のような衝撃的な新しいグッピーとの出会いはありませんでした。しかし、完成度の高いグッピーをいくつも見る事ができました。ポーランドから出品されたHBレッドテールのメスの尾ビレが真っ赤なタイプは、1997年〜1998年に

WGCの目的は、趣味としてのグッピーを世界的に広めること、コンテストを通じて各クラブや各諸団体を世界規模で知ってもらうこと、コンテスト審査における世界共通基準を設けることなどで、これらの実現に向けて着実に努力されてきた結果、今回のイベントの成功につながったと思っています。また、このWGCを通じて、ヨーロッパと日本、またアメリカと日本というように各国間の相互交流が生まれ、一部のマニアでない手に入らなかった様々なグッピーが流通できるようになりました。今後WGCの継続と支援を続けていくことが、グッピーの普及と愛好家の拡大に繋がるものと確信しております。

WGCの功績

今回、コンテストの開催が実現できたのは、1996年から毎年開催されているWGC（ワールド・グッピー・コンテスト）がベースとなっています。このWGCは、大阪の南港ATCで最初に開催され、その後、ドイツ、アメリカ、ブラジルと各地で順次開催され、今年8月の台湾大会で10年目を迎えました。

模様のウェイトは低いのが特徴です。日本のコンテストでは尾ビレの大きさと色彩、模様が重視される傾向がありますので、そのあたりの違いが面白いところです。

要注目のグッピーたち

ここでは、筆者がコンテストで見かけた注目のグッピーを紹介していこう。
日本にも導入できればおもしろいだろうと思われる品種をたくさん見ることができた



この個体は、ピンテールもしくはスピアテールどちらで審査されたかは不明だが、尾ビレの赤が良い。欲を言えばボディ部分にも、少し赤みが乗ってれば良かった



ショートテール (サドル)
日本から出品されたグッピー。ブラックとイエローの色合いが素晴らしい。これから背ビレと尾ビレの形と色が整えば、注目度は必ず上がるだろう



スピードテール (モスコパンダ)
これは、日本のモスコパンダを改良したもののだと思われる。ボディの前半のシルバー色と後半の黒色のコントラストが見事



ポーランドのレッドテールタキシード。なんとと言ってもメスの尾ビレまで赤いのが衝撃的だった



BREAスーパーホワイトだと思われる。体型もしっかりしており、上品さを感じる逸品



メタルモスコレッドレース
ヨーロッパではよく見るタイプだが、日本では見る機会が少ない。レース模様と赤色がマッチングして綺麗だった



ジャバンプールトップソード。ジャバンプールの色彩がしっかり乗っており美しい。やや難点は背ビレの色と形。そこを改良すれば上位入賞間違いなさそう



このダブルソードの特徴は、何と言ってもボディのイエロー部分と全体のプロポーションの良さ。おそらく日本では見られない



こんなにキンピカなライアテールを見たのは初めて。やや小振りであったが、この色彩がなんとも言えない

各国の特徴

かつて日本に少し入ってきたことがあります(その後どうなったのでしょうか)。ボディが金色のライアテールも綺麗でしたし、上半身がシルバーで、下半身が黒の「パンダ」そっくりのグッピーもなかなかのものでした。それから、コイラルレッドのダブルソードと青色のダブルソード。また、メタルモスコのレッドレースも大柄で立派でしたし、ジャバンプールトップソードはとても魅力的に見えました。

出品国ごとに内容を見ると、ドイツ、アメリカ、ブラジルのデルタテール系については、圧倒的に単色のものが多いと思われる。柄物はやはり日本が優位ではないかと思えます。ブラジルのグッピーは体格も立派で、アメリカの魚によく似た雰囲気です。ポーランドは赤系のグッピーが人気で、出品者が限られていたにもかかわらず、色合いもフォームもしっかりしていると感ぜられました。ドイツはダブルソードやライアテール、スピアーなど伝統的なフォルムのグッピーの出品が目立っていましたが、意外に日本からの出品も多くありました。シンガポールは、ほとんど日本に出荷されているものと同じでした。

そんな中でいちばんの注目は台湾で、欧米、日本のグッピーをうまくブレンドして良いものを作っているようでした。尾開きの角度、体格などは日本のコンテストでも、かなり高得点を取れると思われるものが多数いました。ブリーダーのやる気も十分なので、今後もっとも期待できる国でしょう。

日本も大健闘

グッピーは尾ビレの形状で、12品種に分けられています。デルタテール系などの尾

5,500m²の広い会場に所狭しとたくさんのテナントが出店。観賞魚、エビ、水草、器具、アクアリウムに関連するものがいろいろ揃っており、1日いても飽きることはないだろう



出品されたグッピーを5項目の審査基準に基づき審査していく。今回は1ブロックに5名の審査員が担当した。写真はドイツとポーランドの審査員がチェックしているところ

ゼリー状の底床に水草を栽培したものを、カップに入れて販売。初めて見た販売方法だったので興味津々であった



ビレのしつかりとしたものが、やはり人気があり、今回のコンテストでも出品数全体の76%を占めていました。残りのワイルドフォームタイプでは、日本人にはあまりなじみがないフラッグテールやピンテールなどの出品数が少なく、希少な存在となっています。これらのブリーダーそのものが、世界的に見て非常に少ないのではないのでしょうか。ただ、ピンテールは他の品種に比べて固定率が非常に低いので、どうしても見放されるようになってしまっているでしょう。ワイルドフォームの愛好家としては、このようなタイプのグッピーの維持と普及活動に力を入れたいと思っています。

今回、日本から出品されたグッピーは、ファンテール部門、スピアテール部門で見事部門一位の栄光を勝ち取りました。今後、日本国内のグッピー・コンテストの審査基準もグローバル・スタンダード化（基準の統一）への移行が重要となってくるものと思われる。審査員の育成も重要なポイントとなるでしょう。審査基準の統一や審査員の育成によって公平な審査につながるのと共に全体のレベル向上が図れるものと信じております。そのためには、インターネットを通じて普及活動、例えば審査基準と審査ポイントの解説などを公開するのものとつ方法でしょう。また、インターネットを駆使した審査集計なども考えられると思います。

次回の大会へ向けて

最後に、この貴重な期間を通じて強く感じたのは、ドイツ国内のアクアリウム人口の多さと裾野の広さです。グッピーに限らず観賞魚に関する関心度が非常に高いのです。歴史と文化の違いかもしれませんが、我々も学ぶところが多かったと感じております。

おそらく、2007年には第2回インターナショナル・グッピー・コンテストが開催されることになると思いますが、その日のためにいろいろと準備したいものです。

今回の第1回インターナショナル・グッピー・コンテストを実施された ZOO ZA/ACS オーナー Mr. Norbert Zajac さんに感謝すると共に、大会の企画運営を担当されました WGAS Oenier Guelmez 氏にお礼を申し上げます。さらに大会をいろいろとサポートされました関係各位の皆様にお礼申し上げます。